

冬蝶

松岡隆子

冬蝶の自愛の翅を草のうへ
凍蝶にいましばらくの夕日差
海光へ銀杏落葉を放りあぐ
横浜を歩くコートの襟立てて
師も父も亡くて横浜枯深し

考への前を後ろを銀杏散る
落ち葉踏む音のいつより身を離れ
一服の湯茶のさみどり枯を来て
北窓を塞ぎ人思ふ心なほ
気遣ひの言葉互みに夜々の枯
脱稿の眼裏熱き落葉の夜
夜も蒼き空の深さや年あゆむ